

第2 教育研究団体の意見・評価

○ 全国歴史教育研究協議会

（代表 池 口 康 夫 会員数 約 16,200 名）

T E L 03-3393-1331

今年度の大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）について、高等学校において授業を行う立場から、1の「はじめに」では「日本史A」と「日本史B」の今年度の平均点・特色など全体的な概観について、2の「各試験の問題の内容・程度などについて」では問題の内容・程度・設問数・配点・形式などの科目別の意見や要望について、3の「まとめ」では全体的な要望について述べてみたい。

1 はじめに

はじめに平均点や特色などの全体的な概観であるが、今年度の「日本史B」は平均点 57.94 点で、昨年度の平均点 64.27 点と比べて 6.33 点下回り、「世界史B」とは－4.76 点、「地理B」とは－6.51 点の差が出た。ここ 5 年間を見ても、「世界史B」「地理B」はともに 4 回平均点が 60 点を上回っているが、「日本史B」は 2 回にとどまっている。ここ 2 年間は、出題分野を文化史分野中心から政治分野中心に転換し、解答形式も単純な語句の選択問題を設けるなど、得点を上げる工夫がなされ、平均点も 60 点を上回った。今年度は解答形式の単純化を避け、グラフの読み取り問題が工夫されるなど、作問に対する見識と改善の努力がうかがえたが、平均点が再び 60 点を下回るという皮肉な結果となってしまった。史料やグラフから歴史の展開を理解し、歴史的思考力を問うような問題の増加は歓迎すべき傾向だが、地歴科の他の科目との比較もあり、それが大学入試にも使われる試験である以上、多くの受験者が選択する「日本史B」については、平均点で 60 点台の確保ができる作問をぜひお願いしたい。また、今年度の「日本史A」は平均点 46.51 点で、昨年度の平均点 55.95 点を大きく下回り、ここ 5 年間で最も悪い結果となってしまった。これは低かった「日本史B」の平均点を更に 11.43 点も下回る。できれば平均点が 40 点台に下がらぬような作問の工夫をお願いしたい。特に「日本史A」については、高等学校学習指導要領の内容の取扱いに「細かな事象や高度な事項・事柄には深入りしない」とあり、これを踏まえての作問の配慮を切に要望する。

2 各試験問題の内容・程度などについて

日本史 A

本年度は大問 6 題、小問 34 題で問題数は昨年より 2 題減少した。高等学校学習指導要領改訂に伴い 3 年前から導入された「歴史と生活」からの出題が今年度も第 1 問として定着している。出題の時代に関しては、昨年は、各時代バランスよく出題されていたが、今年度は、明治期（14 問）の出題が非常に多かった。また、前近代の出題は、年代配列の一部として 1 問出題されたが、高等学校学習指導要領「日本史A」の「近現代を中心とする」という趣旨に即したものとして歓迎したい。

また、戦後史に関しては、昨年同様に3問で、出題範囲は占領期から独立までの出題になっており、高等学校の授業進度への配慮がうかがえた。分野別では、政治分野からの出題が、昨年同様に13問と相変わらず多い。その他の分野では、社会・経済分野が7問、軍事・外交分野が9問、文化史分野が3問と、ほぼ昨年同様の出題数であった。解答形式では、全34問中、正誤問題が13問で一番多く、年代配列8問・正誤文の組合せ5問など解答形式の割合もほぼ昨年と同じであった。しかし、年代配列の問題（8問）すべてが、過去のセンター試験で出題された形式である六つの選択肢からの選択になったことは、多くの受験者は戸惑ったのではないかと。「日本史B」との共通問題は、昨年同様、大問2問分、小問で全体の3分の1の12問、得点にして35点分も占めている。この点は、例年お願いしていることではあるが、「日本史A」と「日本史B」は、その設置の趣旨や基本的な性格が異なる科目であり、本来であるならば、それぞれ独自の問題を作成するのが望ましく、共通問題としての形式のあり方は、今後も検討していただきたい。「資料活用の技術や表現」の観点から積極的な活用が期待されている資・史料問題に関して、今年度も資・史料（『ペルリ提督 日本遠征記』・『憲政の本義を説いてその有終の美を済すの途を論ず』・「東アジアの地図」など）、統計表（「小作争議の件数と規模」の統計表）、写真（「臨時召集令状」・「明治期授業風景の図」）等が出題された。特に、大問2の間1や大問6の間8は、史料の本格的な内容読み取りで、多様な資・史料を使って歴史的思考力・判断力を問うねらいがうかがわれた。大問5の間3も、昨年までよく出題されていた単なる統計表やグラフの読み取りではない、時期の判断を伴う歴史的思考力と判断を伴う出題であった。この点は、ここ数年指摘してきた点が考慮されたものとして評価したい。また、歴史を学習する上で不可欠な空間認識を伴う問題が、今年は2問（大問1の間3、大問3の間1）出題されたことも高く評価できる。しかし、その一方で昨年と比べて「日本史A」の平均点が大幅にダウンしたことは、今後の検討課題であろう。政治史を中心とした割合が多い年の問題は、平均点も上がる傾向にあったが、今年度は、政治史の問題が多かったにもかかわらず、平均点は46.51点と、ここ数年と比べても10点近くダウンした。やはり、センター試験の趣旨に即して考えれば「日本史A」の平均点は、昨年までの50点台半ばを目指すべきではないだろうか。そこで、今回の分析を通じて、平均点が大幅に下がったいくつかの要因と思われる点として、時系列上の知識・理解を評価する年代配列の問題に六つの選択肢が再び登場したこと、史料の内容を読解する問題が増加したこと、地理的内容を問う問題が増加したこと、語句選択問題がなくなったことなどが指摘できる。しかし、一方でこれらの内容の多くは、歴史の学習にとっては重要な要素である。そこに、センター試験の作問の難しさがあると思われる。そして、もう一つの要因としては、問題の難易度が、高等学校学習指導要領「日本史A」の「細かな事象や高度な事項・事柄に深入りしない」ということに配慮した作問であったかということも気になる点である。これらの課題は、大変難しい問題も含んでいるので、すべてをすぐに解決していくことは難しいと思われるが、今回の試験を契機にぜひ検討していただきたい。

第1問は、「歴史と生活」からの出題で、「歴史資料と文書館」をテーマとした会話形式の問題である。問1は、臨時召集令状を写真から読み取り、その説明を選択する問題であるが、選択肢の「赤紙」は、一般的には知られているかもしれないが、教科書の掲載は非常に少ない。また、「赤紙」の説明には、他の選択肢同様にもう少し工夫が欲しい。問2の年代配列の問題であるが、以前のセンター試験で見られた六つの選択肢が復活した。ここ数年四つの選択肢に慣れている受験者は

戸惑ったかもしれない。（この問題を含みすべての年代配列の8題は、六つの選択肢であった。）なお、この第3問では、前近代の内容（応仁の乱・国学）が含まれてる。問3の事項と県名の組合せの問題は、歴史的思考力と空間認識を測ることのできる良問である。

第2問は、幕末から明治初期の政治・外交・文化に関する問題。中間Aは、『ペルリ提督 日本遠征記』や『幕末外国関係文書』の史料を用いたペリー来航以後の政治・外交についての問題、中間Bは、明治初期の教育に関する問題であった。問1は、ペリー来航に対する民衆や幕府の対応についての史料の内容を読み取る問題で、歴史的思考力・判断力を問う良問である。また、問2、問3も知識と時系列的な認識を問う良問である。問5、問6の学制に関する問題も、単に知識を問うものでなく、図を参考に考えたり、その影響についても考えさせる良問である。

第3問は、明治期の外交問題。中間Aは、明治初期の政治と外交問題、中間Bは、日露関係と北海道の政策についての問題である。問1は、琉球漁民殺害事件と江華島事件をリード文から読み取り、地理的な視点から解答する問題である。歴史の学習においては、どうしても地理的要素は不可欠である。今後も地理的な視点を加味した歴史的思考力を問う出題が望まれる。

第4問、第5問の大問2題は、本試験「日本史B」の第5問と第6問と共通問題であった。

第6問は、近代の政治・社会に関する問題。中間Aでは、明治の立憲政治と条約改正の問題、中間Bは、桂園時代と第一次護憲運動の問題、中間Cは、大正デモクラシーと民本主義の問題である。問3の条約改正問題は、単なる知識でなく、しっかりとした思考・判断も含んだ側面を測ることができる問題である。問5の明治後期の出来事の年代配列、問6の軍部大臣現役武官制の時代ごとの特徴を判断する問題、問7の大正デモクラシー期の社会の動向の問題などは、時代や出来事を中心に歴史の流れをしっかりとらえているかを見ることができる問題である。問8の民本主義の史料の内容読み取りであるが、歴史的思考力を判断できる良問である。今年度は、大問2の問1とともに、昨年以上に史料の内容の読み取りに即した問題が出題されたことは大いに評価できる。

日本史 B

今年度の本試験も大問6題、小問36題で、この設問数は定着してきている。時代別では、原始は弥生時代から、戦後はサンフランシスコ講和条約までが出題され、設問全体の4割近く出題される近現代重視の傾向はこれまでと同様である。なお第3問の中世では昨年度の南北朝・室町時代に代わって今年度は鎌倉時代が、第5問の近代では同じく明治前期に代わって明治中期から昭和戦前期までが出題された。戦後史を含む出題は昨年度と同様4問であったが、単独での出題は昨年度の1問を上回る3問が出題されている。出題分野を見ると、昨年度同様に政治分野からの出題が15問（混合問題5問を含む。）と多く、社会・経済分野の14問（混合問題5問）と合わせて、これも昨年度と同様に設問全体の約6割を占めた。次いで軍事・外交分野が10問（混合問題3問）、文化史分野が4問（混合問題1問）という割合である。文化史分野は今年度の第1問が政治史中心であったために更に減少した。以前のような文化史偏重は好ましくないが、今年度大問2～4の最後の設問が文化史分野であり、これにならって各大問の一つは文化史分野というくらいの配分が望ましい。時代と出題分野の傾向を見ると、第1問以外は昨年ほどの偏りはなく、昨年度は出題のなかった中世の軍事・外交分野からも南蛮貿易が取り上げられている。また近現代では政治分野、軍事・外交分野に加えて社会・経済分野を大幅に増やすなど、バランスをとる工夫がなされている。解答

形式では、正誤問題が昨年度の10題から更に増えて14題と多く、昨年5題の正誤の組合せの問題が8題と増えてこれに次ぐ。一方選択肢の文章が2行にわたる長文のものが増加したのに対して、単純な語句の組合せが9題から5題、語句の選択が3題から0へと著しく減少した。また4題出題された年代配列の問題すべてが、四つの選択肢からではなく六つの選択肢からの選択となった。今年度の「日本史B」の平均点は、ここ2年間60点台だったのに比べて、57.9点と60点を下回った。政治分野を中心にしつつ、各時代ごとの出題分野のバランスをとったにもかかわらず、昨年度より平均点が低かった理由の一つには、この解答形式の変化があげられる。受験者は年代配列の六つの選択肢や選択肢の長文化に戸惑いがあったのであろう。しかし昨年度のような単純な語句の選択問題をなくしたことは、一つの見識である。要は受験者がじっくり設問に取り組む時間の確保が問題であるのだから、多様な解答形式の組合せの工夫を要望するものである。また以下に指摘するところではあるが、今年度は政治分野の設問であっても、かなり難易度の高い用語の知識がなければ解けない問題が見受けられた。用語の知識に偏らない、より日本史の流れの理解を重視した作問をぜひ検討していただきたい。

第1問は、高等学校学習指導要領の「歴史の考察」からの出題で、地方行政区画の歴史の変遷をテーマとした通史問題。地域社会の歴史の出題は妥当だが、地方行政を主題としたため、例年の「歴史の考察」からの出題に比べて政治分野偏重となってしまった。文化史分野の設問を設けるなど、通史問題である第1問は分野のバランスをとる工夫が望まれる。中間Aの地図に関してはリード文とよく対応しており、問2の④も地図から判断できるなど資料の提示方法はよく練られている。しかし中間Bの「関東取締出役」や「三新法」の内容理解などは、「歴史的な見方や考え方を身に付けさせる」とする「歴史の考察」を踏まえた設問としては、細かい知識を問うており疑問を感じる。特に問5の②の「大区・小区」などは教科書の記述から見てセンター試験の水準を逸脱しており、内容理解に直接かかわるだけに問題である。

第2問は、原始から中世初期までの社会・文化に関する問題。問6で院政期の文化を扱っている。昨年度は東北の戦乱を第3問で扱っていたが、「武士の台頭」「中世社会の萌芽」などは、高等学校学習指導要領では「原始・古代の社会・文化と東アジア」の項目で扱っており、「中世初期までの」と注記した上で、第2問で取り上げる配慮を見せている。受験者にもこの方がなじみやすいであろう。この第2問では遺跡や倉庫の復元写真、『信貴山縁起絵巻』の一場面など、図版が豊富に載せられているが、設問に直接反映されていないことが残念である。中間Aは甲乙図から、弥生時代に入って収穫物の貯蔵が可能になったことや、集落間で激しい争いが行なわれていたことを考察させるほうが望ましい。中間Bの郡家の倉庫の復元写真にしても、そこから郡司の役割を考察させるなどの設問の工夫が望まれる。中間Cは古代から中世への移行期の政治・文化の問題で、テーマとしては適切だが、「田楽」の理解など高い知識力を問うている。図版の提示方法と合わせて工夫が望まれる。また問4、5は地方支配の設問で、第1問の主題と重なっており、多様な分野からの出題という点で疑問が残る。

第3問は、中世から近世初期までの政治と外交に関する問題。中間Aは鎌倉時代の政治の問題で、問3は下線部から御成敗式目と判断した上で、その制定理由を考察させる。平易かつ工夫された良問と言える。中間Bはキリスト教の布教と南蛮貿易の問題。問6の南蛮貿易と関係する図版を選ばせる設問は、資料集等でおなじみの題材が選ばれており配慮を感じる。

第4問は、近世の政治と社会に関する問題。中間Aは江戸の都市政策、中間Bは近世の織物生産の問題で、中間Aのリード文、中間Bの『北越雪譜』の史料や『尾張名所図会』の図版の提示など、意欲的でよく練られている。ただしこれも第1問とテーマが類似しており、バランスの点で疑問が残る。問1は『海国兵談』の文章の知識がなくとも答えられるように工夫された良問。問4も史料全体を読み取り、理解する力を問うている、昨年の第2問の問6と同傾向の良問。問5も図の理解だが、④の「問屋制家内工業」という用語で誤文を設けたところが、最後に知識問題になっていて残念。あくまで図の読み取りにこだわってほしかった。

第5問は、近代の政治・社会に関する問題。問2の年代配列は、Ⅲの「納税資格3円以上に引き下げ」が難問である。普選運動がテーマなので、「原内閣」「普通選挙には冷淡」などをキーワードにする方が望ましい。問3も男女平等・女性の権利拡張の活動という視点に即して、「青鞆社」や「新婦人協会」「赤瀾会」などの活動から選択させた方が望ましい。問4は「人民戦線事件」「大内兵衛」が用語として難しい。この場合は日中戦争勃発前後という期間設定が疑問で、これを満州事変から日中戦争勃発前後として期間を広げ、「滝川事件」「天皇機関説問題」などの思想弾圧事件も選択肢に加えられるようにする方法もあったろう。

第6問は幣原喜重郎に関する問題。戦前の協調外交、戦後の改革などで必ず登場することから、問題として取り上げるのに適切な人物である。問3はその幣原の活躍した時代と社会運動の状況をグラフから考察する設問である。グラフの単純な読み取りでないことは評価できるが、「普通選挙法成立」と「昭和恐慌勃発」の二つの年号を両方とも覚えていなければ解けないところが問題であろう。争議の規模を計算させるなどもう一工夫欲しい。戦後史は単独の設問として3題出題されたが、サンフランシスコ講和条約までで、時期としては無理がなかった。ただし問7の戦後の食糧配給制度の問題は、出題は想定できても、高等学校の授業として実際にどこまで教えられているかは疑問である。

なお、今年度も第5問、第6問の大問2題は、「日本史A」との共通問題であった。

3 ま と め

高等学校学習指導要領では、「日本史A」「日本史B」ともにその目標において「歴史的思考力を培い、国民としての自覚と国際社会に生きる日本人としての資質を養う。」ことを掲げている。この点から見て、史料や写真、統計資料などによる問題は、単なる知識を測るのではなく、歴史的な思考力を問う出題となり得る。史料の一部分のみに関連した問題や、データの単なる読み取りでない、資料全体の読解やデータの分析から思考させる問題の工夫を今後ともお願いしたい。また地図を利用しての空間認識を問う問題や、年表などによって時系列認識を問う問題は歓迎したい。一方「日本史B」では「世界史的視野に立って総合的に考察させ」という高等学校学習指導要領の目標の部分が、「日本史A」では「世界史的視野に立ち我が国を取り巻く国際環境などと関連付けて考察させることによって」となっており、「日本史A」での外交分野の問題数については御検討いただきたい。また今年度も「日本史A」「日本史B」の共通問題が大問にして2題出題されたが、異なる科目であることを踏まえ、「世界史A」「世界史B」と同様に、それぞれ独自の問題を作成されるよう、今後も検討していただきたい。

ところで「日本史A」「日本史B」ともに本試験と追試験があるが、問題内容や解答形式が異な

るのに、同一番号の小問の配点が同じになっている。配点は、機械的にではなく、内容・形式・難易度なども考慮していただきたい。また「日本史B」では六つの選択肢の年代配列が、本試験では4題、追試験では6題出題されている。今年度の日本史の難化の要因の一つでもあったので、6択問題は本試験・追試験とも同問数にしていただきたいかった。

最後に、こうした提言に真摯^{しんし}に対応していただいていることを踏まえて、更に、様々な意見交換のできる場が少しでも多く設定されることを希望しておく。